

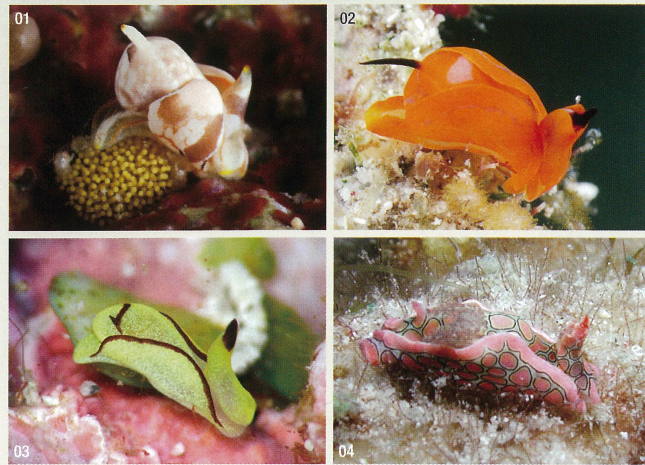


広瀬研だより ちょっとトリビアな無脊椎動物の話

Text = Rie Nakano
Photo = Akira Kawahara, Jun Imamoto and Rie Nakano

水深1mを なめては いかんぜよ

第19回



(01) *Siphopteron ladrones* (Carlson&Hoff,1974) モンツキウミコチョウ。礁池で撮影。(02) *Siphopteron citrinum* Carlson&Hoff,1974 和名なし。これも礁池で撮影。(03) *Siphopteron bruncomarginatum* (Carlson&Hoff,1974) オレンジウミコチョウ。(04) *Sagaminopteron psychedelicum* (Carlson&Hoff,1974) トウモンウミコチョウ。この他 *Sagaminopteron nigropunctatum* (Carlson&Hoff,1973) コンニャクウミコチョウや *Siphopteron pobnpei* (Hoff&Carlson,1983) マダラウミコチョウもカールソン博士が記載した。(05) *Gastropteron* sp. 奄美大島でも見つかっている。写真01,02=川原晃(海の案内人ちびすけ) 03,05=今本淳 04=中野理枝

昨年に続いて、今年もフィリピンに行ってきました。

目的はもちろんウミウシ。ウミウシに開眼してからバツリと異国の海に行かなくなった私だが、フィリピンだけは話が別だ。毎年5月にアメリカやカナダのウミウシ研究者数名がフィリピン某所のリゾートを訪れる。それを知っているウミウシ好きのダイバーも世界各地から集結する。だからこの時期、この某リゾートホテルの宿泊客のほぼ全員がウミウシダイバー。その中に混ぜてもらったのですよ。

世界中の同好の士とともに、フィリピンの極彩色の海に潜ってウミウシを捜すのはもちろん楽しい。しかしそれよりもアフターダイビングのひとつときに、いつもはメールでしか話のできない大先輩の研究者に直接いろいろと教えてもらえるのが有難い。

このツアー参加者の最年長は、御年75歳になる Guam 大学のクレイ・カールソン博士。



耳には補聴器、足下は時々覚束ないが、ダイビングはまったく問題ない。普通にはバックロールでエントリーし、若者でもしんどいカレントの中で普通にウミウシを捜している。夜になればマティニなどを飲みながら持参の顕微鏡を覗いている。

カールソン博士はウミコチョウ類やヒオドシウミウシ類など多くのウミウシの記載をした研究

者で、たとえば右上のウミコチョウ4種はすべて博士と共同研究者のパティ・ホフ博士によって記載された。さまざまなウミウシに *carlsoni* という種小名がつけられているのは、博士がそれだけ多くのウミウシ研究者にリスペクトされている証拠だろう*。

そんな偉い先生に、滞在何日目かのある夜、PCのデータを見せていただいた。

70年代や80年代に記載されたウミコチョウ類の標本写真を見せていただき「素晴らしい！

古いアナログデータをなんと綺麗にデジタルデータに変換してあることだろう」と妙なことに感動したのだが、フと見ると写真の下に採

集地のデータが記されてある。水深は1mとか2.5mとか。

「クレイ、これはスクーバで見つけたの？」

「いや違うよ、グアムのリーフフラット(礁原)だよ」

私の拙い英語のせいか、よくかみ合わない会話だったが、おそらくは磯歩きをするかスノーケリングするかして、博士はそのウミコチョウを見つけたのだろう。およそ40年前の或る晴れた大潮の日、グアムの礁原を逍遙する若かりし博士を、私はちょっと想像してみた。

そういえば、と私は広瀬研の後輩の1人を思い出した。その後輩は沖縄本島西海岸のとある礁原でウミコチョウ類の個体数の増減を毎月調査している。その礁

原の礁池では博士の記載したオレンジウミコチョウ、モンツキウミコチョウ、シフォプテロン・キトリヌムの3種、およびキマダラ、クロフチ、キイロ、アユカワ、未記載種1種の計8種のウミコチョウが、ある時期一斉に見られるのだ。この礁池ではウミコチョウの他にも、例えばブッシュドノエルウミウシやヒプセロドリス・ゼフィラなど、さまざまなウミウシを見ることができる。他にもナマコやウニなどの棘皮動物、キクメイシなどのサンゴ類、甲殻類もいけばホヤもいる。水深が浅い礁池は生き物ウオッチングするにはもってこいの場所なのだ。

話がフィリピンから沖縄本島に大きく飛んでしまったが、要するに「礁池あなどるなかれ!」が今回のテーマなのでした。

飛行機に乗る前日は潜れないからと、沖縄で過ごす最終日を観光地巡りに費やしてきたアナタ。これからは礁池で過ごしましょう! ただし干潮時の礁池でのダイビング(スノーケリング)はサンゴを踏み壊すことになる。礁池には干潮時を避けて潜りましょうね。

* 新種の生物の種を記載する際に、その生物の学名に自分の名前をつけたりはしない。学名に人名がついているのは、多くの場合は命名者が特定の人物に敬意を表してその人物の名前をつけたもので、これを献名という。

●沖縄のサンゴ礁の構造



海岸に立って沖を眺めると、白い帯状に波が砕けている場所があるのが見える。ここが礁縁で、干潮時には干上がるぐらい浅い手前の平らな岩場を(前方)礁原という。礁原の手前には、水深1~3mほどの大きな潮だまりがあって、礁池(沖縄方言で「イノー」と呼ばれる。礁池は水深が浅いために、外洋と比べて水温の変化が大きく、海水の蒸発や雨水の影響で塩分濃度も不安定である。その一方で、礁縁が防波堤の役割を果たすので、外洋が大荒れでも礁池では波がおだやかで、様々な生き物のゆりかごとなっている。

文=中野理枝

Profile >> '87年 OW 取得。'96年頃ウミウシに開眼。小野篤司さんの「ウミウシガイドブック1」「沖縄のウミウシ」を編集。『本州のウミウシ』を編集・執筆。現在は琉球大学大学院 理工学研究科 博士後期課程2年次。雑誌・書籍の編集や執筆の仕事の続けながら広瀬研究室にてウミウシ研究に勤む。「なんとしても3本目の論文をあと半月で書き上げる」と宣言してしまひ自縛自縛の日々。→ hofukutei.exblog.jp

監修=広瀬裕一
琉球大学理学部海洋自然科学科教授・理学博士

Profile >> '91年理学博士取得。その後3つの大学を転々として、'97年より琉球大学に勤務。水深30cmぐらいの礁原で、岩場にしがみついてホヤを探したり写真を撮ることがある。あまり動かないので、たまに釣人や他のダイバーに水死体? と疑われているらしい。

→ www.geocities.jp/lissoclinum/TunicataJ